町史跡

南部氏館跡

山梨県南巨摩郡身延町梅平南部氏館跡遺構確認調査報告書

1984

身延町教育委員会

目　　次

序
1．地理的環境……2
2．調査の経過……2
3．南部氏について……4
4．層序……6
5．遺構……7
6．出土遺物……13
7．まとめ……15

例　　言

1．本書は、山梨県南巨摩郡身延町梅平2955及び2963番地に所在する町史跡南部氏館跡の遺構確認調査の報告書である。

1．発掘調査は、1983年９月２日から９月23日にかけて実施した。

1．調査は身延町教育委員会が主体となり、甲斐丘陵考古学研究会々員を中心に調査団を組織した。

1．本書の執筆・編集は調査団で行い、文責はそれぞれの文末に記した。なお、編集には伊藤正幸氏、平出千恵子氏、遺物の写真撮影には塚原明生氏の協力を得た。

1．発掘調査及び報告書作成にあたって、次の方々から多くの御指導、御助言をいただいた。深く謝意を表したい。

加藤秀幸　安藤孝一　末木　健
椎名慎太郎　中山誠二

1．調査においては、土地所有者である南部光徹氏より全面的な御協力をいただき、ＰＬ．１の写真は同家より借用した。

序

身延町は山梨県の南部に位置し、南北11㎞東西16㎞、町のほぼ中央部を富士川が北から南へ流れ、その西と東に急峻な山並みが連らなり、標高500ｍ以上の地帯が総面積の55％を占め、富士川やその支流に沿って狭い河岸段丘や沖積帯がみられます。

この地に人々はいつ頃から住みはじめ、いつその歴史がはじまったのか……我々が過去の歴史を知るためには先人の残した遺跡、遺物等による以外にありませんが、現在本町に関係あるこうした遺物は、縄文時代中期のものがわずかに認められるほかは、大部分が中世以降のものばかりであります。古記録によれば、往古この地は巨摩郡河内領と称し「南部六郎実長公の領邑なり」とあり、日蓮聖人入山以前は「蓑夫」と書かれていたことは明らかであります。

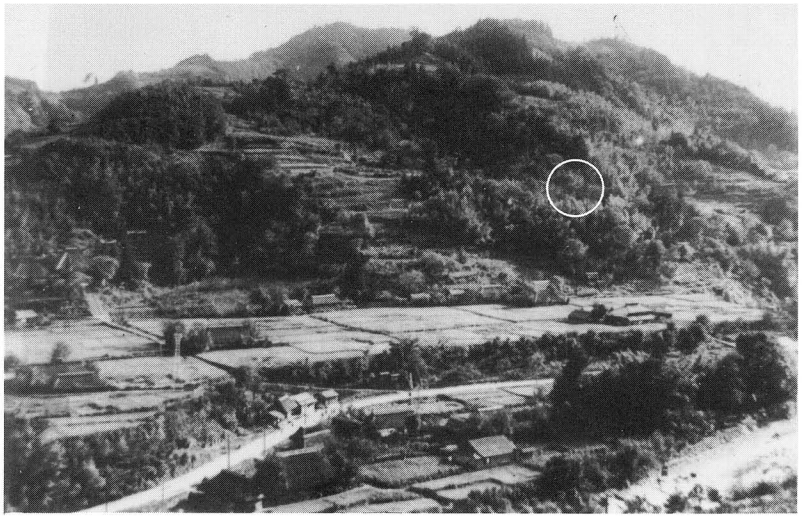
日蓮聖人ゆかりの地であり、又かずかずの伝説もありながら遺跡については前述のとおりであり実態を把握することが困難であります。しかし、すでに幾つかの史実が確認され本町の歴史の解明にあたり推察できるものもあると思われます。

今回、郷土の歴史解明の鍵をもつ南部氏館跡が有志のご理解とご協力により調査されましたことは、郷土愛を育み、貴重な文化遺産の保存継承の盛りあがりに大きな期待をかけるものであります。

この度発掘調査の結果が報告書として刊行されるにあたり、この記録が少しでも今後の研究に役立つことがあればこの上ない幸いであります。また、調査に際して終始文化財保護の趣旨をご理解下され、ご協力下されました土地所有者である東郷寺南部光徹氏並びに甲斐丘陵考古学研究会の方々をはじめ、関係各位のご協力に対して深く感謝申し上げ発刊のことばといたします。

昭和59年３月

身延町教育委員会教育長　佐　野　　孟



ＰＬ．１　大正時代の南部氏館跡とその周辺（○印）

1. 地理的環境

南部氏館跡は、南巨摩郡身延町梅平に所在する。梅平の集落は、波木井川の右岸、富士川との合流点付近に形成された東西1.5 km、南北0.5 kmほどの細長い河岸段丘上に位置し、国道52号線に沿って町並みが続いている。波木井川の両岸は急峻な山々が連なり、この川筋に沿って、かつての河内路が通っていた。

館跡は、集落より一段高い山裾に位置する。ここは波木井川に向って半島状に突出したなだらかな尾根の先端部にあたり、標高は約210 mを測る。跡地は比較的広い平坦地となっており、梅林の中に木造の祠が祀られていた。この南側の一画は古くより「おかまど跡」と呼ばれている。

現在、周囲は山林となっているが、大正時代の写真により、かつてこの一帯が畑地として開墾されていたことが知られる。館跡の北東には身延山久遠寺支院の鏡円坊があり、波木井川を挟んでほぼ真北に、久遠寺が位置する。

(八巻与志夫)

2. 調査の経過

本調査は、国道52号線のバイパス建設計画にともなう埋蔵文化財の重要遺跡確認調査として行なったものである。

身延町梅平地区は波木井川右岸にあたり、河岸段丘上およびこれに続く山裾一帯は、中世の館跡が存在したところとされている。甲斐源氏加賀美遠光の子、南部光行の四男南部(波木井)実長の居館は、身延山久遠寺の支院鏡円坊付近にあったと伝えられている。

南部氏館跡については、昭和13年「波木井城

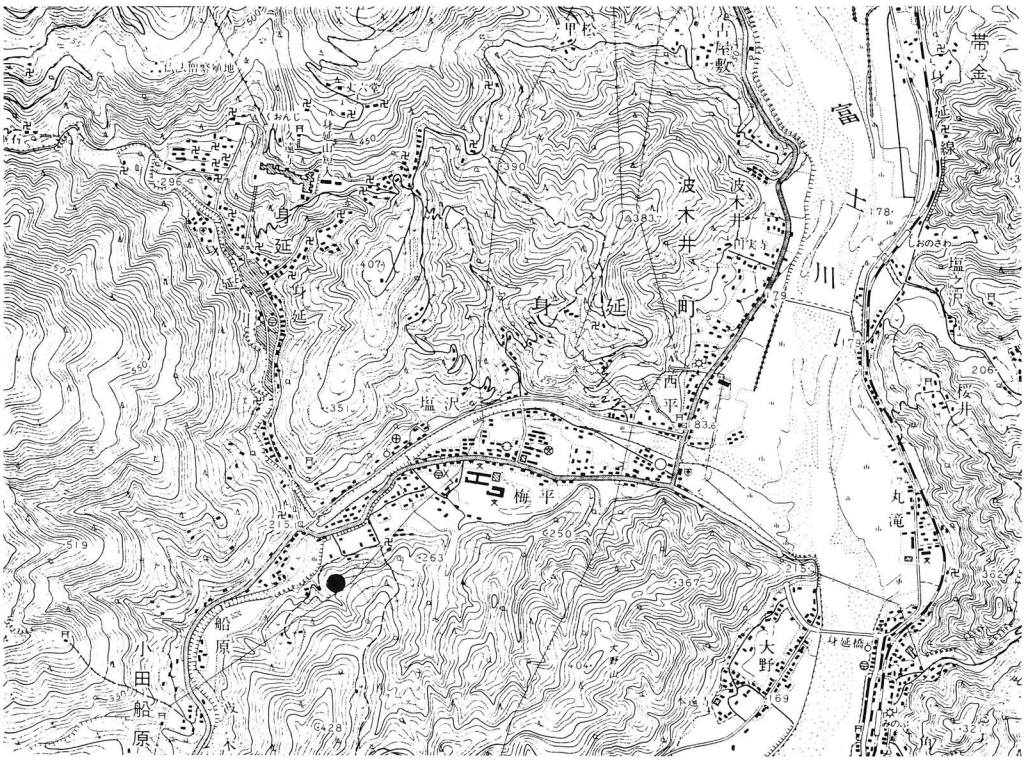


Fig. 1　南部氏館跡位置図（●印）

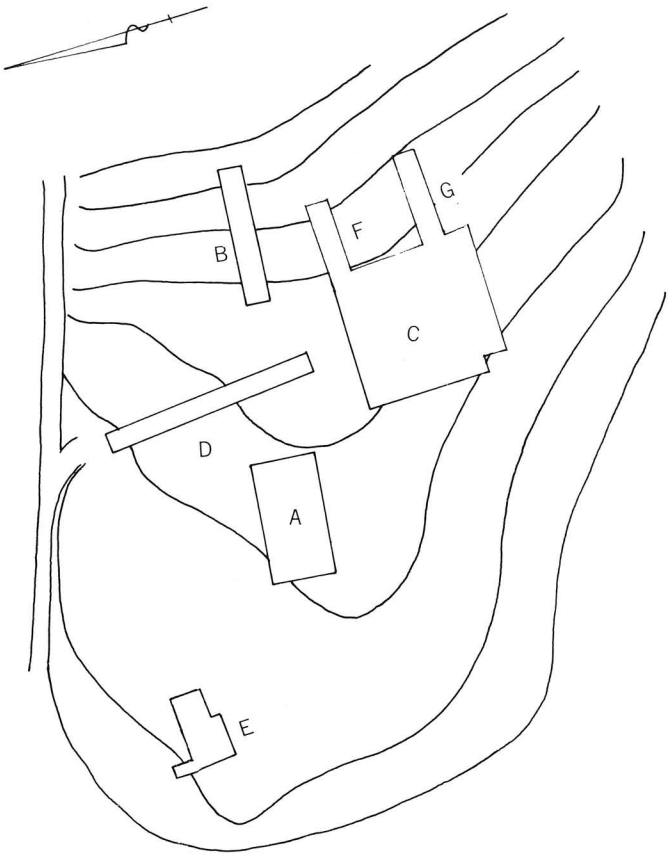


Fig. 2　トレンチ配置図

趾踏査記」（村松志孝『吉野朝史蹟調査会報』第１号）にも紹介されているが、その館跡の明確な確認が期待されるところであった。現在、鏡円坊の南西の梅林中にあるとされており、町の史跡にも指定されている。今回の調査はその地域を中心に行なったものである。

以下調査の経過について述べる。

調査日誌

1983年９月２日

町教育委員会、土地所有者の南部家及び調査員が出席して鍬入れ式を行なう。調査区域内にＡ～Ｇトレンチを設定、それぞれのトレンチの掘り下げを始める。

９月３日

Ｅトレンチに存在する近世墓址の調査を行ない、プランを検出した。確認した４基の墓坑はいずれも円形を呈している。Ｃトレンチではピット群が発見され、掘立柱の遺構群として精査を進める。

９月４日

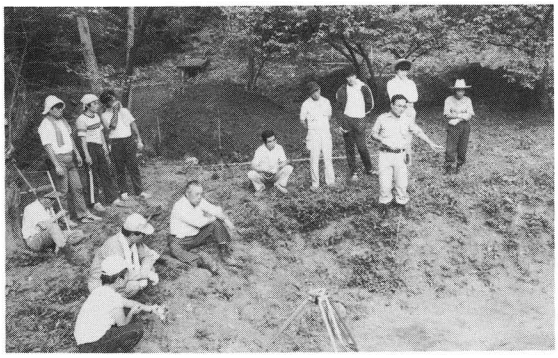
Ｂ、Ｆ、Ｇの各トレンチでは、傾斜面が削平され平坦地が造成されている状況がうかがわれた。Ｃトレンチで検出された掘立柱遺構と近世墓坑群のプランの確認も引き続き行なった。

９月５日

前日までに確認された墓坑群のうち３基を掘り下げ、人骨、鉄片、古銭、釘を検出した。

９月６日

ＰＬ．２　鍬入れ式



ＰＬ．３　ミーティング風景

PL.4　調　査　風　景

PL.5　現地説明会の開催

引き続きCトレンチの拡張、精査を行なう。

9月9日

前日精査を行なったCトレンチでは、南側に新たに柱穴と思われるプランが確認され、3間×4間の広がりをみせた。墓址は実測、写真撮影を行ない遺物をとりあげた。

9月10日

午前中は前日に引き続きCトレンチの精査、墓址の実測、写真撮影を行なった。午後は現地説明会を行なう。

9月11日

Cトレンチの掘立柱遺構群の実測、遺物のとりあげ写真撮影を行なった。

9月23日

写真撮影と一部埋め戻しを終えた。

（田代　孝・日向千恵）

3.　南部氏について

南部氏は、甲斐源氏加賀美遠光の子南部三郎光行（南部町南部）に始まる。光行には兄の秋山太郎光朝（甲西町秋山）、小笠原次郎長清（櫛形町小笠原・明野村小笠原）、弟の加賀美四郎光経（若草町加賀美）がいる。

加賀美遠光は、加賀美荘を中心に、八田牧・大井荘・南部牧・稲積荘・於曽郷など広大な地域を支配したが、光行は富士川を南に下った南部牧を分与され、そこを拠点に南部氏として発展した。その館と伝えられる場所は、富士川が東へ流れをかえるところにあり、付近に残る木戸・堀・御蔵などの地名や伝承からこの一帯であるとしている。館の西方には城山が横たわり、要害の地であったといえよう。

治承四年（1180）の源頼朝の挙兵以来、加賀美遠光と四子らは甲斐源氏の有力な武将として平氏追討などに多くの戦功をあげている。『吾妻鏡』によれば、文治元年（1185）八月二十九日の条には、遠光が信濃守に任ぜられたことが見える。また頼朝が平氏追討のため西海にいる

甲斐源氏略系図（磯貝他「日本城郭大系８」より）

弟範頼に書を送っているが、その中で「甲斐の殿原の中には、いさわ殿（武田信光）・かゞみ殿（小笠原長清）ことにいとおしく申させ給べく候。かゞみ太郎殿（秋山光朝）は二郎殿（長清）の兄にて御座候へ共、平家に付、又木曽に付て、心ふぜんにつかひたりし人にて候へば、所知など奉べきには及ばぬ人にて候なり」と述べている。文面から頼朝の甲斐源氏への警戒心をうかがうこともできるが、小笠原長清や武田信光らに対する寵愛ぶりを知ることができるのである。

また文治五年（1189）七月、頼朝の奥州藤原氏の征討にも遠光父子らは加わっている。このとき南部光行は、藤原泰衡の異母兄西木戸国衡を討ち、さらに平泉では白川太郎・六郎兄弟を討ちとるなど戦功をあげ、頼朝より糠部五郡を与えられている。ここに南部氏と奥州との結びつきが始まるのである。

建久二年（1191）十月、南部光行は奥州へ下向するが、六人の男子のうち、甲州に実長を残し、他の五人を同道している。糠部一戸に行朝三戸に実光、七戸および久慈に朝清、四戸に実朝、九戸に行連を配置した。

光行の奥州下向は、特に南部牧における産馬の経験を買われ、奥州産馬の歴史と広大な牧場を有する糠部郡に、産馬行政の主力として封ぜられたと推察されている。

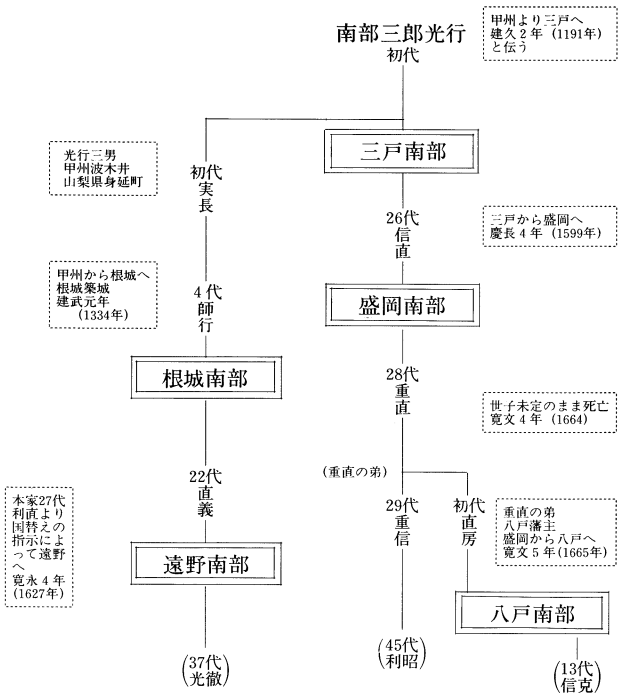
光行を祖とし、三戸地方を拠点として活躍した三戸南部は、後世26代信直が豊臣秀吉の時、三戸から盛岡へ移り盛岡南部となり、近世大名として発展する。なお寛文五年（1665）盛岡南部の二十八代重直の弟直房が盛岡から八戸へ移り、八戸南部となっている。

一人甲州の地に残った実長は、波木井や飯野（大野）、南部の地を領有し、身延の梅平の地に居を構えた。この実長は日蓮宗の開祖である日蓮を請じて、波木井郷内の身延里、現在の身延川上流に庵室を造った。これが現在の身延山久遠寺である。日蓮は安房国に生まれ、延暦寺等に学んだが、「立正安国論」を著わし、他宗派を激しく批判するとともに、鎌倉幕府への批判も行った。そのため、伊豆に流罪となり、さらに佐渡への流罪となった。佐渡の流罪は２年半近くに及んだが、文永十一年（1274）三月になって鎌倉に帰ることができた。しかし、鎌倉へはとどまらず、甲斐国身延へ入り、世を去るまでの８年４か月をここで生活することとなった。この地で日蓮は『撰時鈔』と『報恩鈔』等

を著わすとともに、多くの手紙を書いている。弘安五年（1282）十月に、常陸国へ向う途中、61歳で没している。

南北朝期の甲斐南部氏には、南部政長があった。政長は建武元年（1334）五月、後醍醐天皇より建武中興の功により倉見山の在家、畠地、町屋等の知行を許されている。その後は南朝方に属し、正平二十二年（1367）に南部信光が甲斐国神郷半分、政持が倉見山三分の一を南朝より与えられている。南部氏のなかにも北朝方に属したものもいた。正平七年（1352）二月の武蔵野の合戦に、足利尊氏方の武将として、南部常陸守（太平記）の名がみえる。しかし、南朝方の動向は好ましくなく、明徳三年（1392）には南北朝合一となる。この翌年、南部信光の子政光は、甲斐国を去って奥州八戸へ移った。

（田代　孝・八巻与志夫）



奥州南部氏略系図

八戸市博物館『南部武士展』図録より

八戸市教育委員会　　昭和58年７月15日

4. 層　序

南部氏館跡は、その立地が丘陵上の傾斜地であることと、館構築の際の整地による削平で、土層の厚さや分布が地点によって異なる。館跡中央部付近のＣトレンチ北側を基本層序として扱った。堆積土層は、第Ⅰ層からⅤ層まで５層

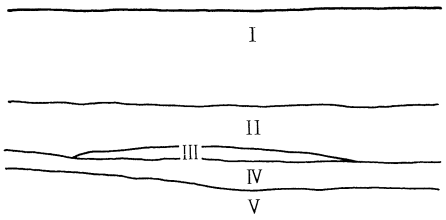


Fig. 3　基本土層図

に大別できるが、調査の進展によりＢ、Ｃトレンチでは II 層が２つに分層されたほか、III 層は一部の地域にしかみられない土層であること等が判明した。以下、その説明を記す。

第Ⅰ層　褐色土層　全体的にしまりがなく、根が大量に入りこんでいる耕作土層である。

第 II 層　暗褐色土層　粘土質でしまりがあり、焼土粒子・炭化物を若干含む。Ｂ、Ｃトレンチでは炭化物・小礫を多く含有し漸移的にしまりを増す II ａ層とに分層が可能である。

第 III 層　黄褐色土層　炭化物を若干含み粘性が強く非常にしまりのある層で、Ｃトレンチ中央部付近にのみ分布する。

第Ⅳ層　黒褐色土層　炭化物、焼土粒子を含む層で粘性しまりがある。掘立柱建物址の掘り込み面は、この層中から始まる。

第Ⅴ層　黄褐色土層　非常によくしまった硬い地山である。約20cm下は、脆弱な岩盤となる。

（信藤祐仁）

5. 遺　構

本館跡の立地する地域には城館を示すような土塁、堀などの防御的諸施設は特に見あたらず一定の広がりをもったなだらかな傾斜の平坦地が存在しているだけであるが、B、F、Gの各トレンチの調査の所見によると、地山である第Ⅴ層を整形してほぼ平坦な土地を人為的に造り出している様子が確認された。このことから、後述する掘立柱建物址の築造のために大規模な土木工事が施された状況を知ることができる。またCトレンチを中心とする地域には掘立柱建物址の地盤を固めるかのように粘性の強い黒褐色土層が20cmほどの厚みでみられ、この遺構の築造に深くかかわっていることがうかがわれた。

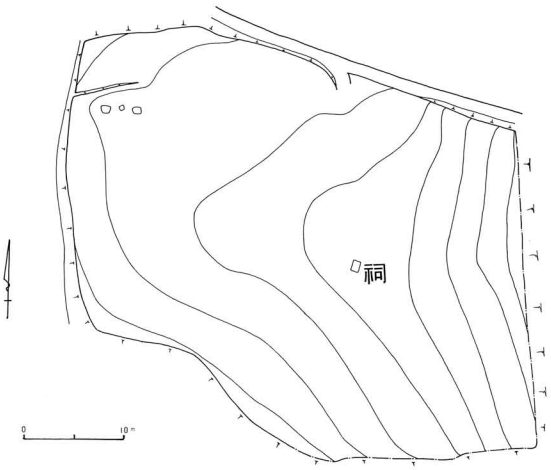
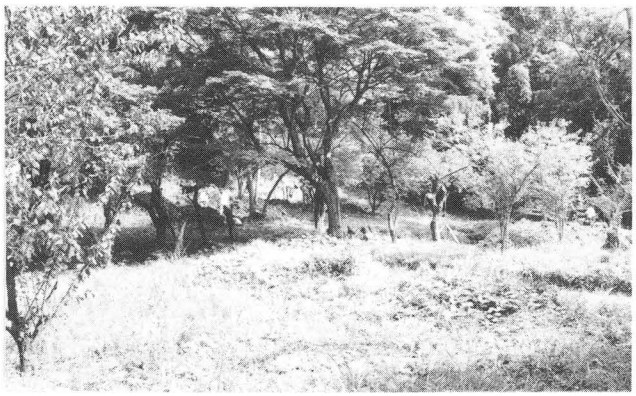


Fig. 4　南部氏館跡の地形



ＰＬ. 6　南部氏館跡の近景

本館跡の調査で検出された遺構は、この掘立柱建物址のほかに土坑３基、Ｅトレンチの近世墓址で墓坑４基、土坑２基であった。以下それらの概略を述べてみたい。

(1)　掘立柱建物址　(Fig. 5、ＰＬ.7～9)

調査区域のほぼ中央の通称「おかまど跡」と呼ばれてきた地点を中心に設定したＣトレンチ及び拡張部分において、少なくとも東西３間、南北４間、柱間220～230cmの掘立柱建物址が検出された。柱穴の直径は30cmほどで、深さはほぼ30cm前後であったが、柱痕等は確認できなかった。この建物址の北東部には、東西１ｍ、南北80cmほどの広さに焼土、土器片、炭化物及び小礫が集中して堆積している。

今回設定した調査面積は限定されているために建物址の全容は未確認であるが、柱穴の状況から、さらに南及び西側に延びている可能性もうかがえる。

(2)　土坑 (Fig. 5･10、ＰＬ. 11･12･16)

Ｃトレンチの建物址の北側中央部及び南西部に計３基の土坑が検出された。またＥトレンチの近世墓址内からも土坑２基が確認されている。Ｃトレンチの１号土坑及び３号土坑は直径１ｍほどで、深さはそれぞれ46cm、30cmであった。また２号土坑は長径70cm、短径55cmの長円形を呈し、深さは20cmであった。内部には小礫がぎっしりつめられていた。

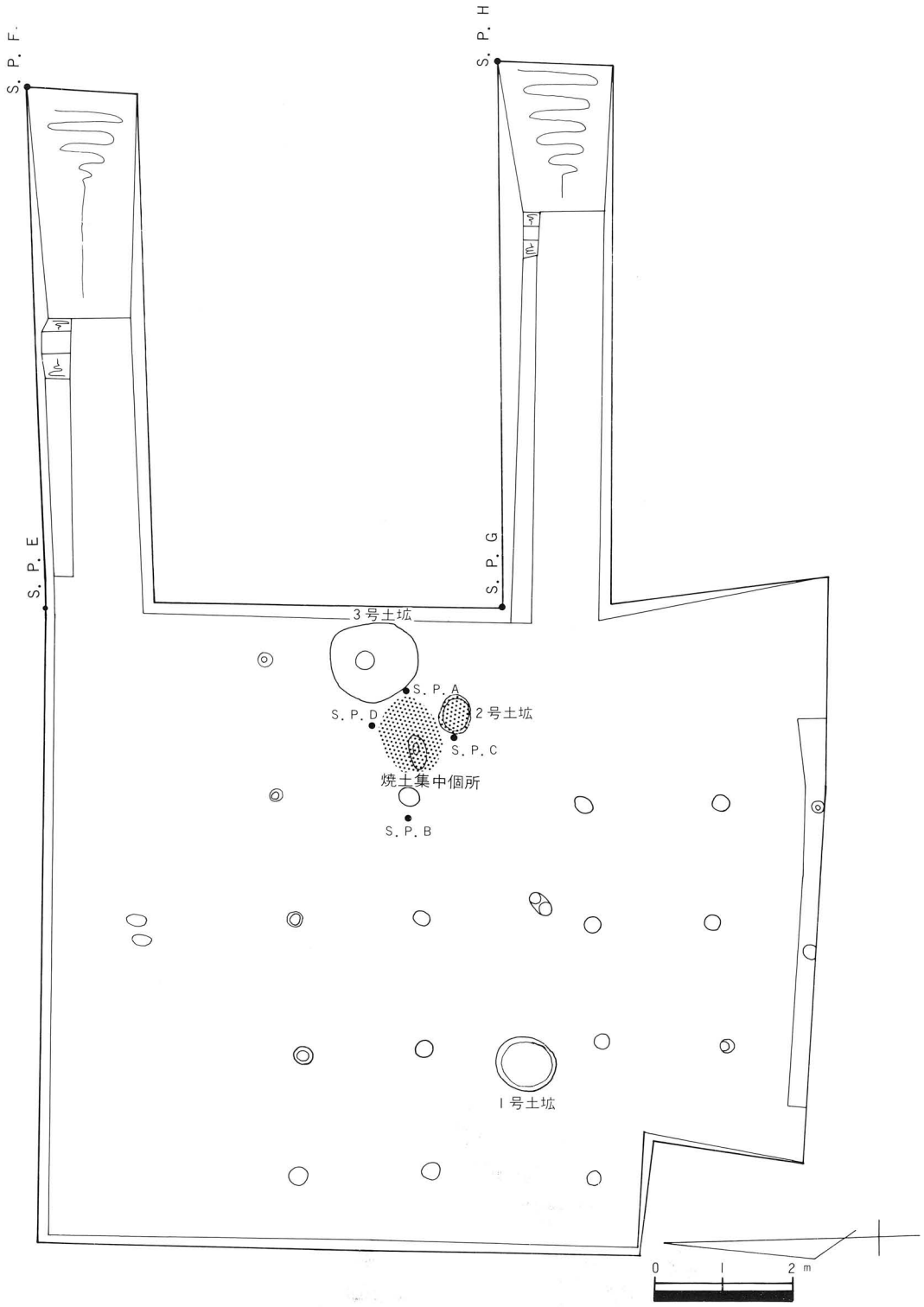


Fig. 5　掘立柱建物址

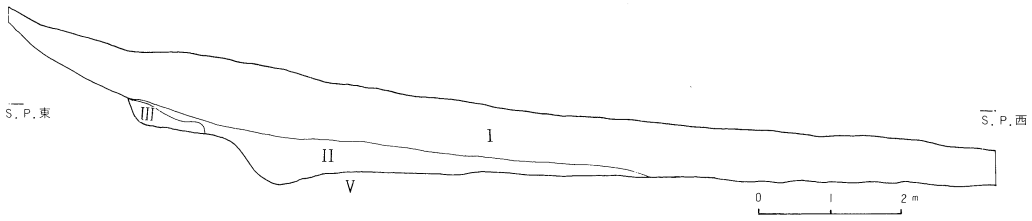


Fig. 6　Bトレンチ南壁セクション図

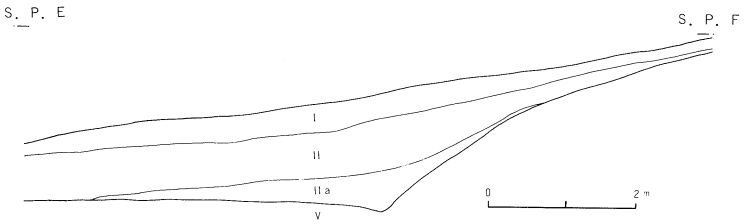


Fig. 7　Fトレンチセクション図

層序（B・F・Gトレンチ）

第Ⅰ層　　褐色土層

第Ⅱ層　　暗褐色土層

第Ⅱａ層　暗褐色土層
第Ⅱ層よりしまりを増す

第Ⅲ層　　黄褐色土層

第Ⅳ層　　黒褐色土層

第Ⅴ層　　黄褐色土層
（地山）

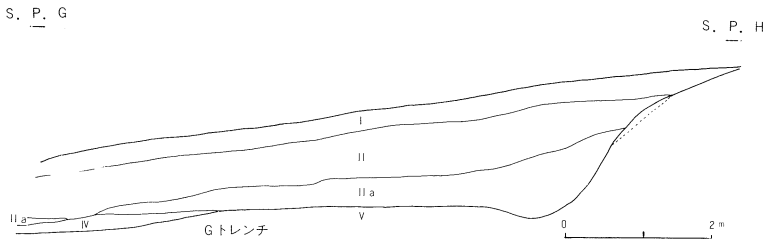


Fig. 8　Gトレンチセクション図

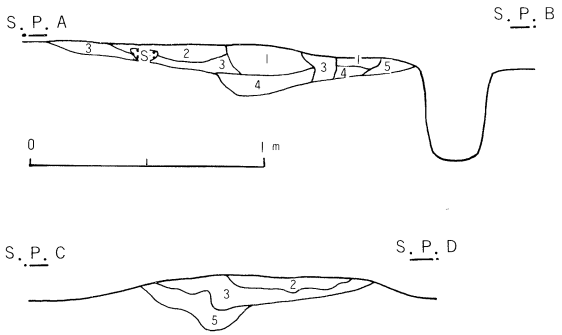


Fig. 9　焼土集中個所セクション図

層序（焼土集中個所）

第１層　赤褐色土層（焼土層）炭化物・灰含む。

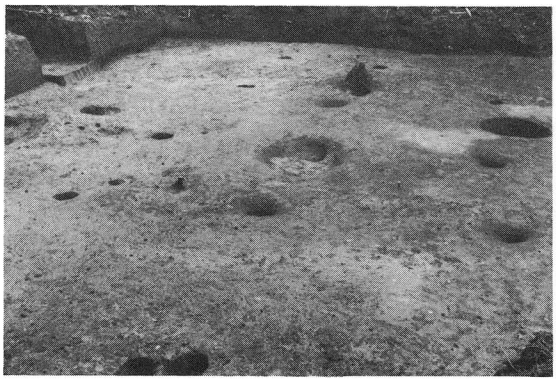
第２層　黒色土層（炭化物層）焼土・灰ブロックを含む。

第３層　暗褐色土層　焼土粒・灰を含む。

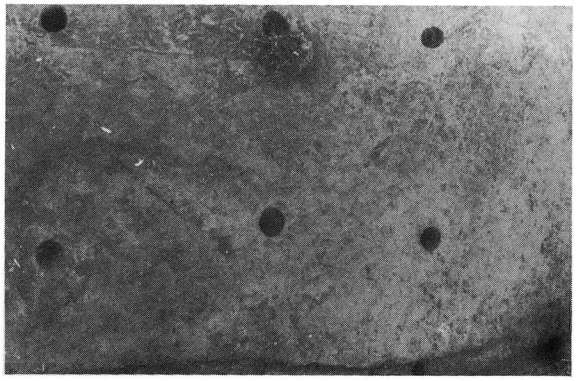
第４層　褐色土層　　焼土・灰を若干含む。

第５層　黒褐色土層　炭化物・焼土を若干含む。

ＰＬ．７　掘立柱建物址（南から）

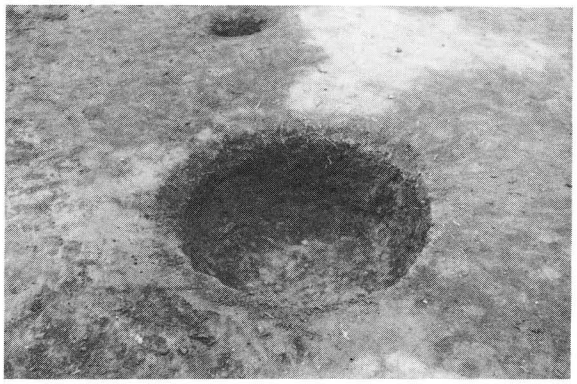


ＰＬ．８　掘立柱建物址（北から）

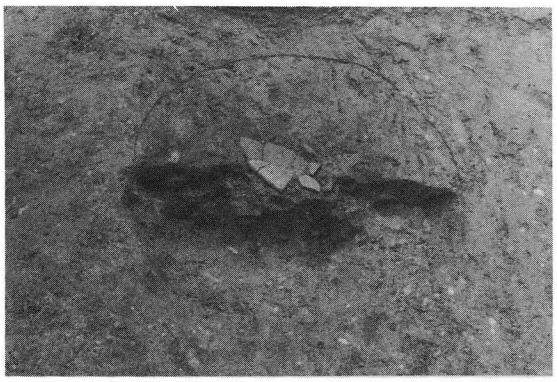


ＰＬ．９　掘立柱建物址（上から）

ＰＬ．10　焼土集中個所の調査



ＰＬ．11　１　号　土　坑



ＰＬ．12　２　号　土　坑

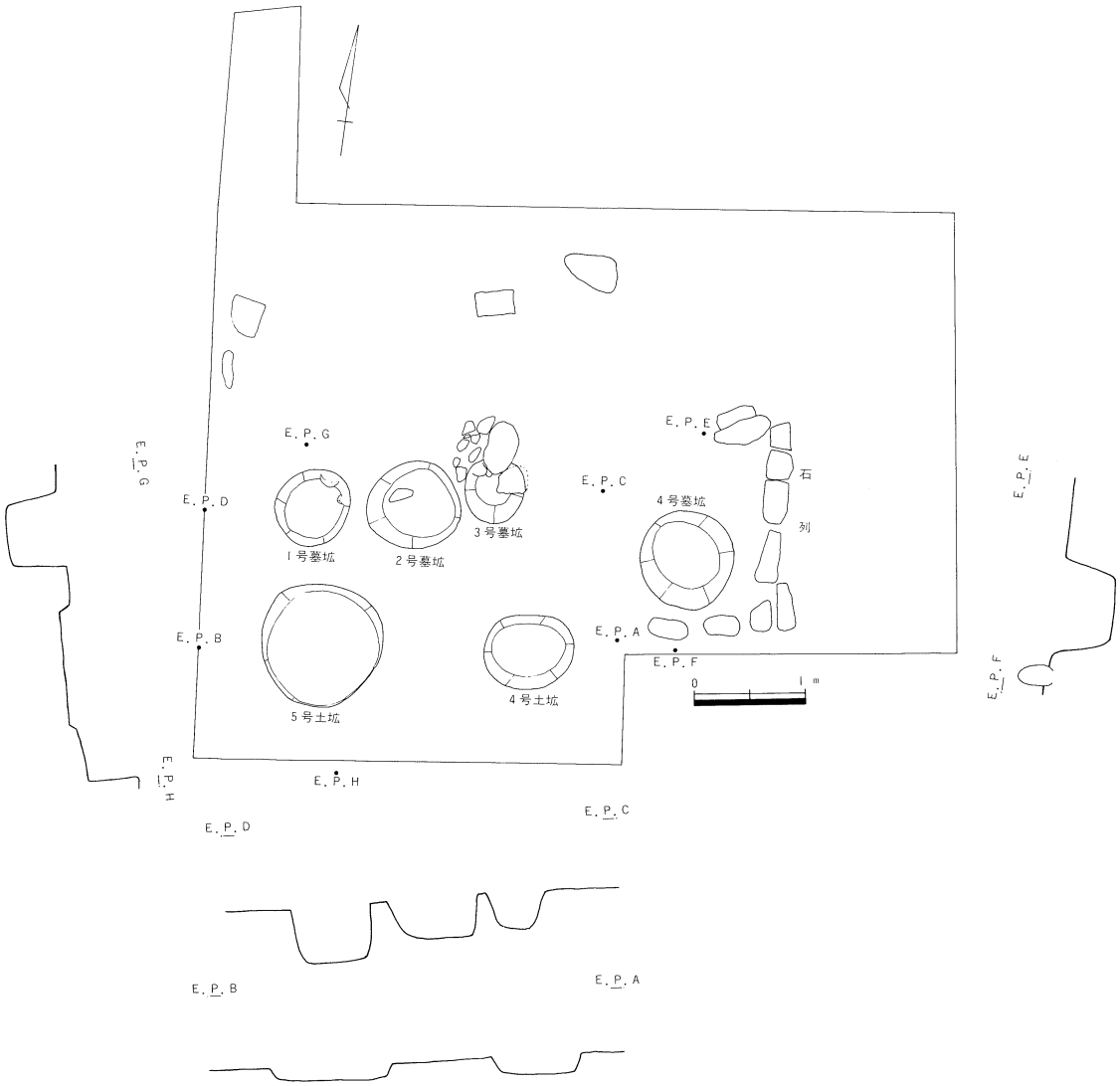
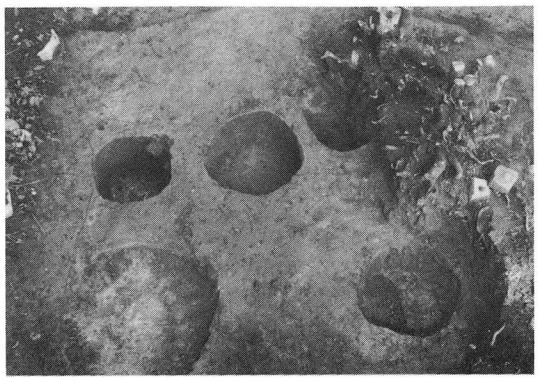
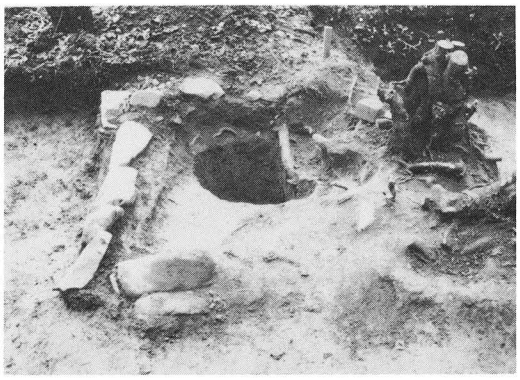

E. P. G
E. P. D
E. P. B
E. P. H
E. P. C
E. P. E
E. P. A
E. P. F
1 号墓坑
2 号墓坑
3 号墓坑
4 号墓坑
5 号土坑
4 号土坑
石
列
0
1 m
E. P. G
E. P. D
E. P. B
E. P. A

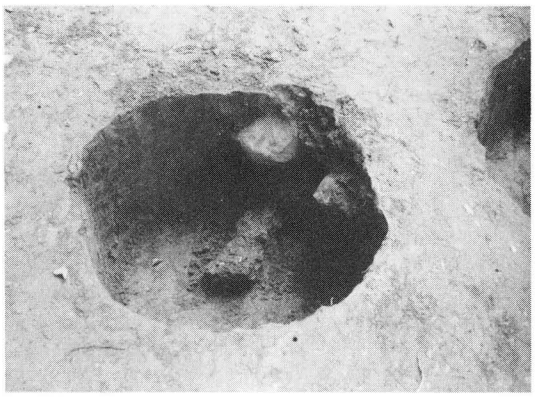
Fig. 10 近 世 墓 址



ＰＬ.13　近世墓址



ＰＬ.14　４号墓坑と石列



ＰＬ.15　１号墓坑

ＰＬ.16　４号土坑土師質土器出土状況

Ｅトレンチで検出された４号土坑は直径80cm深さ14cmときわめて浅く、平面プランを確認した時点では墓坑と思われたが、墓坑とは考えにくく、とりあえず土坑として取り扱った。また５号土坑は直径110cm、深さ11cmと４号土坑同様に浅く、やはり墓坑とは考えにくいが、内部から古銭、釘等が出土している。

(3)　墓坑（Fig. 10、ＰＬ.13～15）

調査区西北端に設定したＥトレンチからは、４基の墓坑が検出された。

１号墓坑

本遺構は直径68cm、深さ54cmで、内部から人骨・古銭が出土している。

２号墓坑

本遺構は直径84cm、深さ38cmで、内部からはやはり古銭が出土している。

３号墓坑

本遺構は直径38cm、深さ33cmで、上部には石が置かれている。

４号墓坑

本遺構の周囲には40cm前後の石を方形に並べている。墓坑は直径87cm、深さ48cmの円形プランを呈し、内部から古銭、釘、人骨が出土している。

なお以上の墓坑群上部には、寛文13年(1673)享保６年（1721）、宝永元年（？）の年号の入った墓碑が存在していた。

(4)　溝状遺構

Ｂ、Ｆ、Ｇの各トレンチの所見によると、調査区東側の斜面に接する下部からは幅30cm前後のＶ字状を呈する溝状遺構が検出された。三か所に設定した各トレンチに共通するため、斜面に沿って設けられたものと考えられる。

（八巻与志夫）

6. 出土遺物

遺物は、掘立柱建物址に伴う2号土坑や焼土集中個所、近世墓坑及びその周辺に集中しており、他に、3号土坑底部より骨片が、また、各グリッド覆土中より少量の近世陶磁器片や土師器片（Fig. 11－8）、縄文時代の石斧などが出土している。

2号土坑に伴う遺物は鉢と甕の破片（Fig. 11－1・2）で、多量の焼土・炭化物・小礫に混じって検出された。鉢は口縁部径42cmを測り内面にハケ目調整痕を残している。胎土は雲母・小砂粒を含み、褐色を呈する。口縁が大きく外傾しており、摺鉢状を呈するものと思われる。甕は口縁部径34cmを測り、外面は縦位に、内面は横位にハケ目調整痕を残し、口縁部外面には横ナデがみられる。胎土は砂粒を多く含み、若干の雲母を含んでいる。

共に本遺構の時期決定資料として重要であるが、類例に乏しい。器面調整・胎土などの観察から、平安時代末葉に位置づけることも可能かと思われるが、館跡の築造年代を遡ることになり、今後の資料の増加を待って検討していきたい。

近世墓坑覆土中からは古銭（PL. 20）・鉄

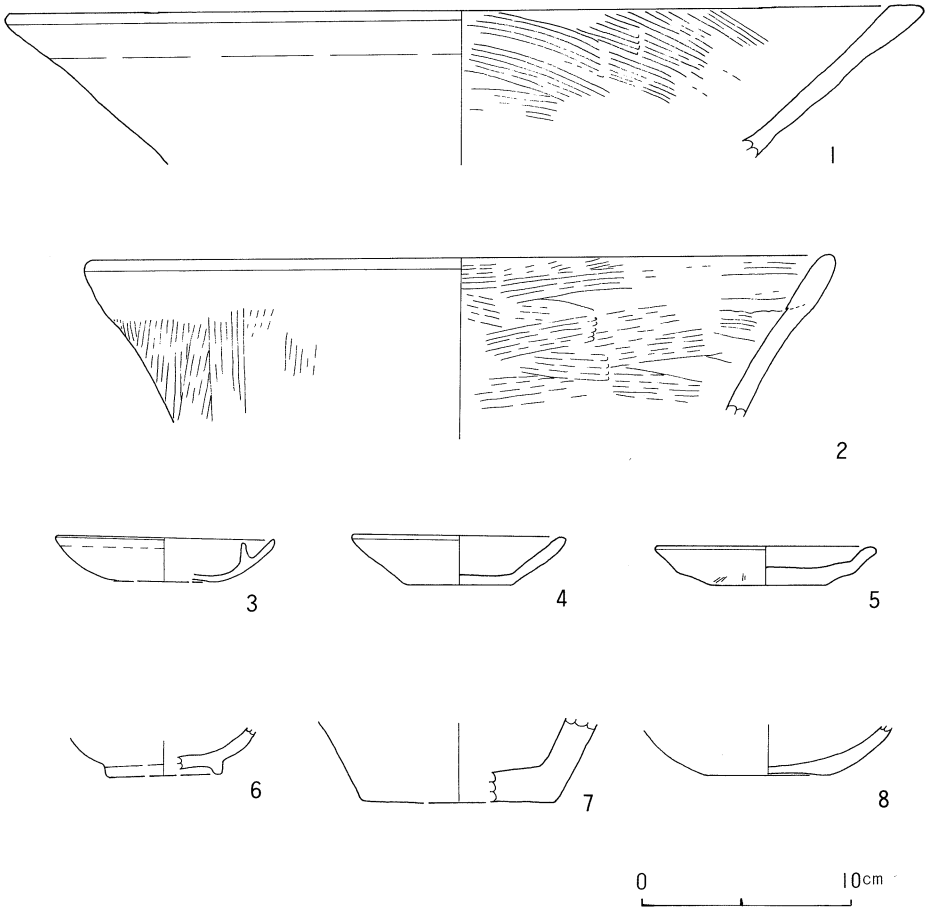
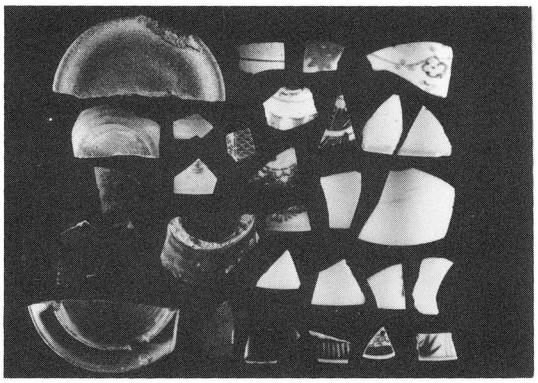
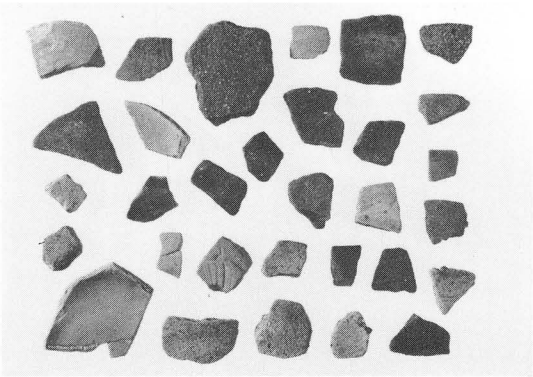


Fig. 11　出土遺物実測図

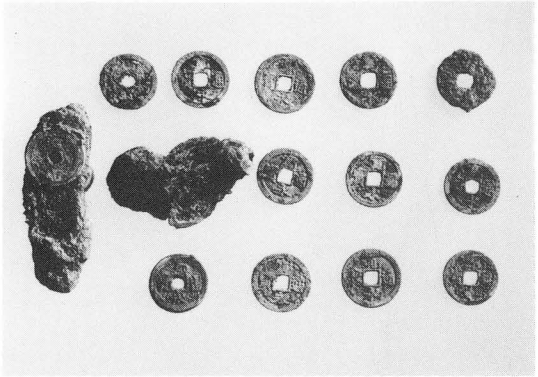
ＰＬ.17　鉢・甕



ＰＬ.18　土師質土器・近世陶磁器

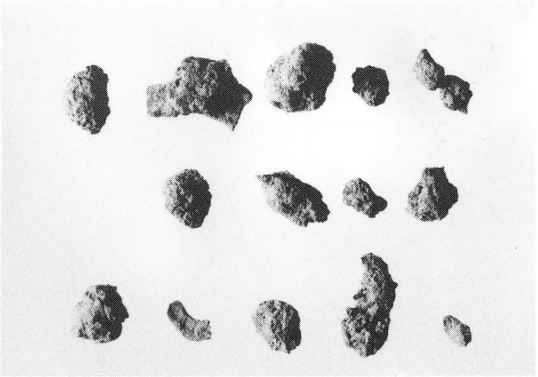


ＰＬ.19　土師質土器ほか



ＰＬ.20　古　　銭

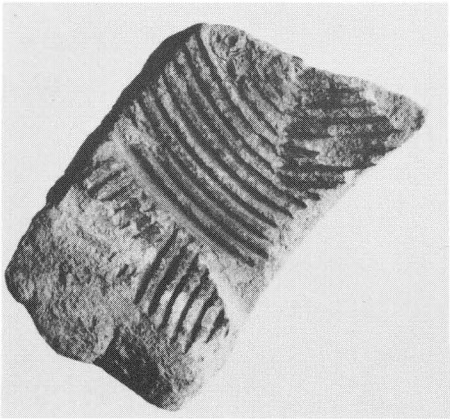
ＰＬ.21　釘・鉄製品



ＰＬ.22　釘・鉄製品

製品（ＰＬ.21･22）・角釘・人骨・土師質土器片（Fig. 11－４）が検出されており、墓坑周辺では、近世以降の磁器片（Fig. 11－６）とひょうそく片（Fig. 11－３）が発見された。土師質土器は口径10cm、器高1.8cmを測る半完形品であり、故意に半分に割られた痕跡を残している。民俗学でいう「霊抜き」を示す遺物であろう。胎土は小砂粒・金雲母を含み、赤褐色を呈する。ひょうそくは口径10cm、器高２cmを測る半完形品で、内外面に鉄釉を施し、底部には糸切り痕を残している。

Fig. 11－５・７は１号土坑より検出されたもので、５は口径10cmを測る土師質土器、７は摺鉢片である。　（数野　雅彦）



ＰＬ.23　摺　鉢　片

ま　と　め

甲斐源氏の一統加賀美遠光は、加賀美荘のほか、八田荘、大井荘、稲積荘、南部牧など現在の甲府以南の広大な領域を支配し、強大な勢力を有していたが、さらに長男光朝をはじめ子供達をそれぞれの支配地域に分拠させ勢力の定着を図っていった。南部牧が与えられ初めて南部氏を名乗った南部光行もその１人である。既にこのことは南部氏についての項で概略してきたので多くを述べないが、南部氏にかかわる史跡や伝承は身延町や南部町を中心に広がっている。

日蓮宗の開祖日蓮を招聘した光行の三男実長は、南部の地でも特に波木井や飯野の地を領有し、自身も波木井郷梅平に居を構えたと伝えられている。この点に関しては古くから梅平の地域に根強く伝承されていたようで、遠野南部家の家臣西村吉左衛門が享保４年に主家の命を受けて身延山に出向いた折、梅平の地をたずねていることからも知られる。すなわち、「波木井郷之内梅平と申所実長様御屋敷之御旧跡に御座候、山城と相見得、山続に御座候、東西六拾間程、南北七拾間程之廣さに御座候、古之御かまとの石と申候而、少之石右御屋敷之内に御座候」[注1]と見え、梅平の実長の屋敷跡を見分している様子がうかがえるが、これがおそらく本館跡の最初の踏査であろう。昭和に入って、吉野朝関係の史跡の掘り起こしと調査研究が進められるなかで、特に南部実長の旧跡が注目を受け、身延の地の踏査が行われており、その内容が報告されている[注2]。また近年は甲斐丘陵考古学研究会の会員による全県的な城郭調査の折、梅平の地が踏査され、館跡として検討が加えられている[注3]。

これらの踏査で、実長の館跡の実態が確実に把握し得たか疑問も残るが、しかし、古くから実長の屋敷跡の伝承が地域住民の間で語りつがれ、この地が「御屋敷」と呼ばれながら尊ばれてきた様子をうかがうことができる。

さて、今回の調査は、南部実長の館の旧跡と伝えられ、町の史跡に指定を受けている梅平の「おかまど跡」を中心に発掘調査を行ない、遺構の確認や年代の把握、館跡の形状等を探ろうとするものであった。その成果は既に遺構や出土遺物の項で述べてきたが、若干の考察も加えてまとめにしたい。

「御屋敷」と呼ばれている「おかまど跡」及びその周辺には、現状では館跡と明確に断定し得る遺構は認められず、単に平坦地を残すだけ

である。通常中世城館としての館跡には防御施設の堀とか土塁の存在が認められるが、しかし本館跡のような中世初めの所産でしかも山腹を利用して築造されている館は類例に乏しく一般的な形状や特徴はあまり知られていない。従って今後は、本館跡のような類例を多く求め、この時期の館跡のあり方を改めて追求しなければならないであろう。また、本館跡の場合、現在の「おかまど跡」の地点だけが館跡として認め得るのか、あるいは山腹に広範囲に及んで存在している段々上の平坦地も含めて館跡を考えるべきか検討を要するところである。

ところでB、F、Gの各トレンチは斜面をどのように利用して館が築かれたかを探ろうとしたものだが、これらのトレンチからは斜面を削平して平坦地にするという大規模な土木工事の形跡が一様に認められた。Fig. 6～Fig. 8で図示したセクション図からうかがえるように地山である黄褐色土層が平坦になっており、しかも山ぎわに小さな溝が設けられているのである。このことから本館跡の築造に際しては、土地の削平による大規模な整地作業が行われたと理解できる。

Cトレンチでは黄褐色土層上に20cm程の黒褐色土層が広がっている。この層は大変粘性が強く、この土層を掘り込んで掘立柱建物址は築造されている。現状では4間×3間の規模が知られているが、さらに南と西には拡大する可能性がある。また東側の一画には礫まじりの焼土の堆積があり、土師質土器の鉢や甕などが混入している。柱穴と焼土の堆積の位置関係に一部疑問もあるが、おおむね掘立柱建物址に伴なう遺構と推定が可能である。平安時代以前に普遍的に見られるかまど跡に似るが、袖が認めがたいなど形状が若干異なり、炉としての可能性を含め今後詳細に分析しなければならないが、掘立柱建物址の一画に、こうした施設が設けられていたことは本遺構が日常の生活に使用されたものであったことをうかがわせている。焼土中に混入している土器は本建物址の築造、使用時期を把握するきめ手になるが、今後類例を待って結論を出していきたい。

E区で検出された近世墓址は本館跡とは直接かかわりのある遺構ではないが、前述の遠野南部家の西村吉左衛門が訪ねた折、この地を守っていた老人がおり、その老人に関係する人々の墓である伝えも残っている。寛文年間以降の墓域で年代的にもほぼ一致している。6基の土坑群のうち、4基は遺構の形状や骨、歯の検出と角釘・古銭・土器類の伴出から墓坑と認められ、他の2基は関連する遺構であろう。墓坑はいずれも円形を呈し、釘等の出土から埋葬に木棺が使用されていたことが知られる。副葬品として古銭が6枚一様におさめられ、また土器類は半截されているものが多いが、「霊抜き」の行為など当時の葬送儀礼の一端をみせている。

【注】

(1) 「西村吉左衛門覚書」『南部家文書』享保4年ほか同書の「宇夫方平太夫覚書」にも見える。

(2) 村松志孝「波木井城址踏査記」、入田整三「甲州南部及び身延吉野朝史調査旅行」『吉野朝史蹟調査会報』第1号　1938年

(3) 磯貝正義他『日本城郭大系』第8巻長野・山梨　1980年

（萩原　三雄）

南部氏館跡調査組織

調査担当者　萩原　三雄

調　査　員

田代　孝　　早川　方明　　小野　正文
室伏　徹　　八巻与志夫　　出月　洋文
山下　孝司　　猪股　喜彦　　数野　雅彦
川口　純一　　日向　千恵　　信藤　祐仁
畑　大介　　山田　周平　　櫛原　功一
古谷健一郎

調査補助員

原　節郎　　井上　和彦　　石川　隆敏
落合　淳　　古屋　俊

町教育委員会

委員長　千頭和一男　　教育長　佐野　孟
委　員　熊谷　儀信　　網野　正一
望月　為文

社会教育課

課　長　澤田　成一
係　長　若林　勝彦
主　事　佐野　治仁　　大野　久方
稲葉　義仁

作業協力者

宇佐美太宏　　松野　修　　市川　正文
稲葉　隆明　　渡辺　公教　　高山　一行
渡辺　熊雄

調査協力者

宇佐美次雄　　内野　光徳　　中里　悠光
佐野　正　　望月　紀道　　佐野　逸平
高橋　公男　　鴨狩　広　　保坂　博
望月　光行

町史跡
南部氏館跡
発行日　1984年3月30日
発行所　身延町教育委員会
印刷所　まいづる印刷